［タイトル］

国際標準記録史料記述(ISAD(G))の小規模史料群への適用による編成記述の試み

好善社文書調査より

Arrangement and Description by Applying ISAD(G) to Small Organizational Archives: Case of the Kozensha Archives

［著者］

松山龍彦 | Tatsuhiko Matsuyama

［キーワード］

| 編成記述 | ハンセン病 | 好善社 | ISAD(G) | EAD |

archival arrangement and description / Hansen's disease / Kozensha / ISAD(G) / EAD

［要旨］

東京都目黒区にあるキリスト教系慈善団体・社団法人好善社（こうぜんしゃ）には、明治初年以降の文書（好善社文書）が伝来している。小規模団体の残した記録であり、組織的文書[1]というよりも個人・家文書の色合いが濃い史料群である。この史料群の整理に国際標準記録史料記述の一般原則（ISAD(G)）の適用を試みた。その際見いだされた編成と記述に関する問題点について考察を加える。目録作成の段階において、編成に先立つ記述の有効性を論じた。記述作業に際してEAD（Encoded Archival Description）と対照させつつ目録に採用する要素を選別した過程を示した。ISAD(G)要素のうち「日付」と「記述単位の数量とメディア」が内包する問題点を具体的に論じた。編成作業に関しては時期別サブフォンドの適用の詳細について述べ、あわせて人為的シリーズによる資料種別表現の可能性について論じた。

The Kozensha archives are the records produced and preserved by a Japanese charity organization from the early Meiji era. Irregular methods of documentation and filing give the collection an arbitrary nature, much like a personal or family archive. This discussion attempts to use ISAD(G) to solve problems in the arrangement and description of the Kozensha archives. Description prior to arrangement is recommended as an effective approach to incoherent collections. ISAD(G) elements are selected in conjunction with EAD (encoded archival description). The elements “date” and “physical characteristics and technical requirements” are examined thoroughly to identify the problems embedded in them. Arranging subfonds chronologically is found to be a logical measure for hierarchizing disordered records. The implementation of an artificial series to express the genre and forms of the records is examined.

1 —— 本稿の課題

1994年にInternational Council on Archives (ICA)により採択されたアーカイブズ資料の目録記述の国際標準であるGeneral International Standard Archival Description[2]（以下ISAD(G)）の主な特徴は、階層式記述と統一要素の使用にある。史料群に含まれる資料全体をツリー型の階層構造として表現することで各資料の史料群全体の中での位置づけや資料同士の関係を把握できるようにするとともに、異なる機関間での目録の共有化を目指している。また、使用される26の記述要素は、原則的に全ての記述単位に適用することが前提となっており、階層のレベルにかかわらず統一されたシステマティックな構成は、目録のデータ化や利用のしやすさにつながっている。このような特徴をもった記述標準は、文書の作成から整理、保存までが高度に組織化された史料群においては本領を発揮することが期待されるが、個人文書や家文書に代表される秩序の薄い小規模史料群への適用については、その適合性、有用性について一考の余地があるものと思われる。ISAD(G)の階層を構成するフォンド以下のシリーズ、ファイルという各階層の名称は、一般的な組織において作成される事務文書のあり方を想定したものであるため、恣意的な資料の収集、整理、保存になりがちな小規模史料群においては、その階層名どおりの意味合いをもたせることは困難である。

しかし従来からの、史料群全体の解題と資料一点ずつの名称・作成者・年代ほか情報を列記するタイプの目録においては、全資料の中における個々の資料の意味合いや他の資料との関係は分かりづらい。小規模の史料群に対してもISAD(G)を用い、階層型目録の特長を活かすべきであろう。それにより、ISAD(G)が目指す「異なるアーカイブズを超えた目録記述の汎用性」という構想からは離れたとしても、少なくともひとつの史料群内において整合性のある秩序を構築し目録化することは、利用の利便性から考えても十分検討に値するものと思われる。

本稿は、筆者が学習院大学大学院博士前期課程において行った好善社文書のアーカイブズ学的調査[3]（以下「本調査」）の過程で行きあたったISAD(G)の適用と、それにともなって生じた編成記述上の問題（調査段階の手順とISAD(G)の適用における問題点）について述べる。

2 —— 好善社の来歴と好善社文書について

東京都目黒区にあるキリスト教系慈善団体・社団法人好善社（こうぜんしゃ）は1877（明治10）年、プロテスタント長老派宣教師ケイト・ヤングマンにより築地居

1 —— ここでは、特定の組織・団体において確立された文書の作成方法および整理保存方法により成立した史料群を組織的文書と呼ぶ。

2 —— *ISAD (G): General International Standard Archival Description*, International Council on Archives, 1994.

3 —— 松山龍彦「キリスト教結社好善社文書の調査・編成記述・資源化に関する基礎的研究」、学習院大学人文科学研究科アーカイブズ学専攻2013年度修士論文

4 ── 好善社の定款上の事務所は白金の明治学院大学内に置いていたが、実際は藤原鉤次郎氏宅が事務所となっていた。
5 ── 好善社広報紙『ある群像』1978年5月号の100年史刊行特集の中で藤原偉作氏は以下のように語っている。「実は、この緑の箱とは別に牛革の立派なトランクの中にも、資料がいっぱいはいっていた。それをおやじがときどきひっぱり出しては見ていたのを覚えている。あれは焼失してしまった」。

留地で結成された結社を起源とする。新栄女学院の生徒10名を社員として始められたもので、初期の活動はキリスト教伝道と社員相互扶助であった。その後一人のハンセン病患者との出会いが契機となって、1894(明治27)年に現住所にハンセン病患者の救済を目的とした施設「慰廃園(いはいえん)」を設立した。以降は1942(昭和17)年の閉園まで、この施設が好善社の活動の中心となった。また、戦後は理事長の藤原鉤次郎(ふじわら・こうじろう)を中心として全国のハンセン病療養所への慰問と礼拝堂建設、募金活動が行われた。その後も療養所でのワークキャンプやハンセン病に関する啓蒙活動を展開しつつ現在に至っている。

著者が研究の対象とした好善社文書は、社団法人好善社の所蔵する明治以来の文書であり、慰廃園の跡地に現存する好善社の社屋に伝来保存されているものである。文書は事務所内の書類用キャビネットと古いトランクおよび茶箱(一部は倉庫内)に収納されていた。これらの資料には、慰廃園が運営されていた1894(明治27)年から1942(昭和17)年の間に作成されたものが多数含まれており、日本における私立ハンセン病療養所の運営と活動、国のハンセン病政策との関連などを知る上で貴重な情報を提供すると思われる。

初期の記録は築地新栄町にヤングマンが創立した新栄女学院内で作成されており、好善社の例会議事録ほかが残されている。1894(明治27)年に東京市目黒村にハンセン病療養所慰廃園が設立され、活動の中心となった。好善社結社以降はヤングマンの住居近くの藤原鉤次郎(元社員)宅が使われており、おそらく文書もここに保管されていたと思われる[4]。

その後文書は1923(大正12)年の関東大震災の際に避難する藤原氏の家人に託され難を逃れた。また、1945(昭和20)年の米軍による空襲時には、藤原氏によって目黒の旧慰廃園内に焼け残った舎宅(のちの藤原邸)へと移動された。文書は藤原鉤次郎とともに災害、戦火をくぐり抜けたあとは藤原家の住居兼好善社社屋内に保管され続けたと思われる[5]。

1968(昭和43)年に始められた100年史編纂事業において文書の整理が行われた。編者の記憶によれば、文書は社屋内の書棚に並べられていたが、編纂開始以前からある程度内容ごとに封筒詰めされていた。これは藤原偉作元理事長(藤原鉤次郎氏長男)の手によるものということであった。

つまり、好善社文書は(1)築地新栄町から藤原鉤次郎氏とともに移動した初期文書、(2)終戦まで好善社(慰廃園)事務所で保存していた文書、(3)戦後の活動で藤原鉤次郎により追加された文書、(4)100年史編纂にあたって収集追加された文書の4種類が混在している。現用文書として活用されていた時期の秩序は、震災と戦災による移動、それに100年史の編纂作業により喪失している。

好善社文書には日誌・会計簿・報告書・書簡・パンフレットほかが含まれている。資料種別ごとの大まかな点数を以下に示す[表1]。ただし、ファイルレベルと

してカウントされたもののほとんどは今後さらなる細分によりアイテムレベルに分解されて記述されるべきものである。また、本調査では目録化しきれなかったものとして写真がこの他に数百枚あることが分かっている。

表1 —— 好善社文書資料概数(種類別)

	ファイルレベル	アイテムレベル
文書	14	131
書籍	5	38
書簡	27	43
図面	21	11
写真	3	9

3 —— 調査過程と目録記述の概要

本調査における個別の編成記述上の問題に言及する前に、調査の過程について概観し、実際の文書の記述内容(部分)と編成の結果を提示しておきたい。

調査は、まず資料の置き場所について好善社スタッフに確認してのち文書が保管されているトランク、茶箱およびキャビネットを確認することから始めた。キャビネットには一定のブロックごとに番号を振った[写真1-4参照]。そののち社屋内の別部屋へ資料を順次運び出して一点ずつ記述および撮影を行った[写真5-6参照]。

記述にあたっては調査の前段階からデータベースでの将来的な利用を意図していたため、マイクロソフト・エクセルを用いスプレッドシートに直接入力した。全体の枠組みとしてISAD(G)を採用しつつ、EADタグとの対応をはかり必要に応じて要素を細分化した。実際の記述内容(部分)を表2に例示する。

1

2

3

4

5

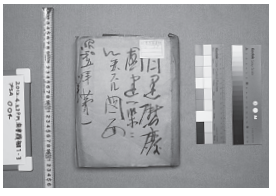
6


写真1 —— トランク
写真2 —— 茶箱
写真3 —— キャビネット
写真4 —— キャビネット内ケース
写真5 —— 記述撮影風景
写真6 —— 撮影写真

表2 ――好善社文書記述（部分）

3.1.1	資料番号	<unitid>	0-000-000-000	1-000-000-000	1-001-000-000	1-001-000-001
3.1.2	タイトル	<unittitle>	好善社文書	好善社創立期（第1期）	日誌・会議録	（好善社記録）
3.1.3	日付	<unitdate>	1877-1978			1877-1888
3.1.4	記述レベル	<c>	フォンド	サブフォンド	シリーズ	アイテム
3.1.5	数	<physdesc> <extent>			2冊	1
	色・スタイル・ 原材料・製作法	<physdesc> <physfacet>				冊　和綴じ
	種別	<physdesc> <genreform>				日誌・会議録
	サイズ（タテxヨコ） （cm）	<physdesc> <demensions>				24x17
3.2.1	作成者	<origination>	好善社	好善社		慰廃園（好善社） 戦中まで
3.2.2	組織歴	<bioghist>	好善社（こうぜんしゃ）は 1877（明治10）年に…	好善社は、 キリスト教宣教師 ミス・ヤングマンを…		
3.2.3	資料の来歴	<custodhist>	大まかに以下の4種の 伝来資料から成る…	築地新栄女学校以来の 活動の記録の一部は…		
3.2.4	入手先	<acquinfo>	社団法人好善社 （現所蔵機関）			
3.3.1	範囲と内容	<scopecontent>	社団法人好善社が 所蔵する自組織文書のうち、 明治10年の…	1877（明治10）年 好善社設立からの日誌。 一部第3期の年代に…		好善社会合の 議事録
3.3.3	追加受入	<accruals>	今後文書の追加は 予定されていない。			
3.3.4	編成	<arrangement>	組織内に部署が 存在しないため、 サブフォンドは 時代別に設定した…	1シリーズを含む。 シリーズ001： 〔日誌〕（第1期）	2ファイルを含む。 ファイル001： （好善社記録） ファイル002： 好善社記録	
3.4.1	アクセス制限	<accessrestrict>	文書に関して定められた 利用の規定はない…			
3.4.3	言語	<langmaterial>	日本語 （英語資料数点を含む）			
3.4.4	物理的特徴・ 技術的要件	<phystech>	戦前までの和紙資料は 状態が良い…			
3.4.5	検索手段	<otherfindaid>	100年史「ある群像」の編纂に 使われた資料に…			
3.5.3	関連記述単位	<relatedmaterial>				
3.5.4	出版書誌情報	<bibliography>	「ある群像 好善社 100年の歩み」好善社刊…			
3.6.1	注記	<note>		例会後に清書された ものと思われる…		

1-001-000-002	2-000-000-000	2-009-000-000	2-009-000-002	2-009-001-000	2-999-000-000	2-999-000-002
好善社記録	慰廃園期（第２期）	イベント関連	日本基督新栄教会 六十週年 紀念祝謝会順序	観桜会招待状	シリーズ外資料	〔写真アルバム〕
1889-1902		1931-	1933	1931-1958		1929
アイテム	サブフォンド	シリーズ	アイテム	ファイル	シリーズ	アイテム
1		3袋、1冊、1枚	1	1、1枚、7袋		1
冊　和綴じ			冊　パンフレット	包み　封筒		冊　アルバム
日誌・会議録		書簡　出版物	出版物	書簡		写真
24x16			27x19	33x24		20x25
						目黒小滝園 安原写真館
	目黒村に設立した 私立ハンセン病療養所…					
	目黒にあったハンセン病 療養所・私立病院 「慰廃園」…					
好善社会合の 議事録	1894（明治27）年から 1942（昭和17）年まで 活動した…	新栄教会の 創立60周年を 祝う会の式次第	皇族ほか・観桜会 招待状、皇太后 大喪儀関係資料…		慰廃園礼拝堂内 式典写真	
	6シリーズを含む。 シリーズ001:〔日誌〕 （第２期その１） シリーズ002: 日誌（第２期その２）…	人為的シリーズ。 3アイテムと 3ファイルとを含む。 アイテム001: 〔書翰写し及び…"		封筒のため ファイルレベルとする。 8アイテム含む		
			ヤケ（1）		退色（2）	
後半は第２期だが、 内容から第1期に 入れた…			2つ折り 保存のため広げる	封筒表左上に 鉛筆書きで 「皇室関係、表彰」		

次に、記述を通じて得られた情報にもとづいて編成を行った。フォンド「好善社文書」は調査の対象とした明治以降1960年代までの文書である。サブフォンドには時代ごとに顕著な特徴が見られる好善社の活動時期を単位とし、「1. 好善社創立期(第1期)」「2. 慰廃園期(第2期)」「3. 好善社戦後期(第3期)」「4. 100年史編纂資料(第4期)」および「9. 年代不明資料」の5つを設定した。シリーズには連続性の確認できた日誌や会議録、会計簿以外の資料にも目録利用の便宜をはかるため、資料種別を表す人為的シリーズを導入した[図1参照]。

4 —— 編成記述上の問題

好善社文書の整理にあたって生じたいくつかの問題について「4-1:調査段階の変則的手順」「4-2:使用するISAD(G)要素の選定」「4-3:ISAD(G)要素記述の限界」「4-4:非組織的文書の編成上の問題(時代別サブフォンドの適用・人為的シリーズによる資料種別表現の可能性)」の順に考察したい。

4-1:調査段階の変則的手順

好善社文書は組織規模の小ささと家族経営的な運用のため、組織的計画的に作成保存されていない。文書の書式、ファイリング方式、収納順と収納箇所における一貫性を欠いている。現用時には存在していたと推測される秩序も内部関係者による複数回にわたる編綴や仕分けを経て失われており、雑多な資料の集積と呼べる。特に本調査が対象とした明治以降1960年代までの史料群は秩序がきわめて薄く史料群全体の構造が判明しなかった。

アーカイブズ目録の構成について、ISAD(G)では "general to specific"(大まかなグルーピングからより詳細なレベルまで)という表現が用いられており、これは "respect des fonds"(出所原則)からの実際上の帰結(practical consequence)であり、一般に認められている理論的原則にもとづいていると述べられている[6]。しかし、アーカイブズ調査の開始時において文書全体の構造を把握しえない状況においてはどの資料または資料のかたまりがよりgeneralでありまたspecificなのかを判断できないことは自明であろう。

ISAD(G)の目録記述適用について、青山英幸による箱館奉行文書目録作成の実験では目録記述に先立って編成作業を行っている。そこでは資料に含まれる組織に関する記述や役職の一覧、各簿冊の表紙に記載されている部署名から部署の構成を割り出している。各部署の上位階層となる統括部門について不明確な部分があるため、箱館詰、江戸詰などを人為的に設定している[7]。森本祥子による行政文書へのISAD(G)の適用の試みにおいても、「階層構造の

6 —— *ISAD(G): General International Standard Archival Description Second Edition*, International Council on Archives, 2000, p.8, 1.7.

7 —— 青山英幸「国際標準記録史料記述等による箱館奉行文書目録作成の実験について」、『北海道立文書館研究紀要』第12号、1997年、44-84頁

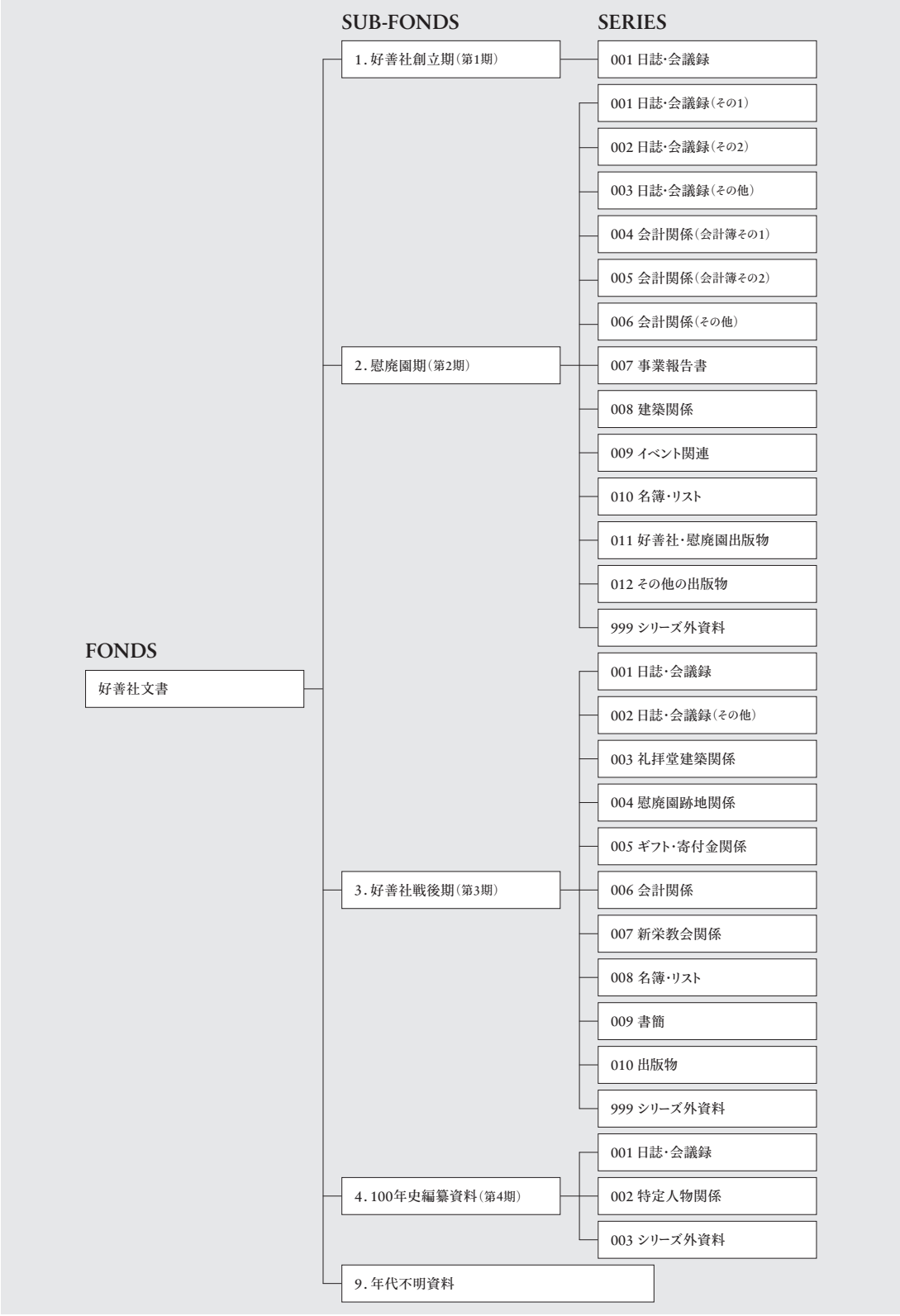

SUB-FONDS
SERIES
1. 好善社創立期（第1期）
001 日誌・会議録
001 日誌・会議録（その1）
002 日誌・会議録（その2）
003 日誌・会議録（その他）
004 会計関係（会計簿その1）
005 会計関係（会計簿その2）
006 会計関係（その他）
2. 慰廃園期（第2期）
007 事業報告書
008 建築関係
009 イベント関連
010 名簿・リスト
011 好善社・慰廃園出版物
012 その他の出版物
999 シリーズ外資料
FONDS
好善社文書
001 日誌・会議録
002 日誌・会議録（その他）
003 礼拝堂建築関係
004 慰廃園跡地関係
005 ギフト・寄付金関係
3. 好善社戦後期（第3期）
006 会計関係
007 新栄教会関係
008 名簿・リスト
009 書簡
010 出版物
999 シリーズ外資料
001 日誌・会議録
4. 100年史編纂資料（第4期）
002 特定人物関係
003 シリーズ外資料
9. 年代不明資料

図1 ―― 好善社文書の構造

分析は記述の前提」という理解のもと、素材としたアジア大会組織委員会の組織構造図に準拠した階層構造を構築している[8]。

しかし森本がこの研究に先立って行った諸家文書への適用実験では、様々なレベルの混在する記述においては「利用者が、自然に群の階層性を理解できるように導くように表現するのは容易ではない」と述べ、「個人の文書がばらばらに集積されている史料群で、何をもってシリーズとし、ファイルとするか、という概念は理論化できるものなのであろうか。雑然とした諸家文書の整理では、まずは一点ずつを確認し、その記述をもとに原秩序を復元することになろう」[9]と述べ、編成を可能にするための前段階としての記述作業の必要性に言及している。安藤正人によるISAD(G)の適用の試みは諸家文書を素材としたものであるが、やはり詳細な資料の調査によって判明した歴史的体系構造の理解の上に編成作業が可能となっている[10]。

これらの試みから分かることとして、ISAD(G)が提唱しているフォンド、サブフォンド、シリーズ、ファイル、アイテムといった概念が適用しやすい構造の組織で一貫した文書の作成および管理機能をもっており、組織図などから組織機構がはっきりとわかる組織的文書の場合は記述の前段階としての編成が比較的容易である。これに対し、自らの組織構造を客観的に表現した文書がない組織やそもそも構造自体が定まっていない団体、秩序だった整理のされていない非組織的文書については、編成前の調査段階として組織と文書の詳細を知るための記述作業が必要とされている実態がある。つまり調査の初期段階でISAD(G)でいうところのアイテムまたはファイルレベルに当たる現物資料を一点ずつ記述し、その結果から秩序を導き出すことで、より上位階層であるシリーズ、サブフォンドを含めた史料群全体の編成が可能になると考えられる。

4-2：使用するISAD(G)要素の選定

本調査では当初からデータベース化をめざし、記述作業は用紙記入ではなく、PCを用いて直接スプレッドシート（マイクロソフト・エクセル）へ入力することにした。まず、記述のための準備作業として行ったISAD(G)要素の選定について説明したい。

目録記述に使用するISAD(G)要素を選定するにあたっては、将来的に検索可能なデータベースを構築することを期して、ISAD(G)に準拠しつつも、ウェブ目録記述の標準EAD（Encoded Archival Description）タグとの対応を考慮した。ISAD(G)の全26要素について、ISAD(G)とEAD 両者が各要素に求めている記述情報の内容を確認しつつ、好善社文書への適合性を見極めて、使用／不使用を決定した。

ISAD(G)は7エリア26要素から構成されているが、これら26要素のすべてを記述単位ごとに使用することが求められているわけではない[11]。階層上、包

8 —— 森本祥子「『国際標準記録史料記述（一般原則）』適用の試み：行政文書の場合」、『史料館研究紀要』第29号、1998年、1-29頁

9 —— 森本祥子「国際標準記録史料記述（一般原則）適用の試み：諸家文書の場合」、『史料館研究紀要』第28号、1997年、249頁

10 —— 安藤正人「ISAD(G)を準用した基本目録記述の試み：越後国佐藤家文書の場合」、『記録史料学と現代』、吉川弘文館、1998年、199頁

11 —— 2.2 Information relevant to the level of description, ISAD(G)において、各記述単位に必要な要素だけを記述することとされている。

摂関係にある資料の記述においては、記述の重複を避けるために、同一要素が省略されうる。また、記述単位によっては、たとえば作成者、作成日や受け入れ先が不明であるため、要素に入力すべき情報がないことも多い。また、雑多なコレクションが混在するアーカイブズにおいては、組織アーカイブズを前提とした要素は採択する意味合いが薄い。したがって、記述を開始する前に目録全体に使用する要素を選定することは、作業の効率化、データ量の軽減のために有効であると思われる。

要素選択の事例として、アジア歴史資料センターの目録作成を紹介した小川千代子の論文がある[12]。同センターは複数の機関から受け入れたデジタル化資料をインターネット上で提供するため、インターネット上での資料情報共有を目的として採択されたメタデータセットの国際標準であるDublin Core[13]の15要素とISAD(G)第1版の26要素との対応表から、同センターの目録に含まれるべき9要素を決定した経緯が述べられている。

本調査において使用する記述要素を決定するにあたっては、Encoded Archival Description Tag Library Version 2002（以下EAD2002）の付録Appendix A.1に納められた、ISAD(G)とEADの対応表ISAD(G) to EADを参考にした[14]。一つ一つの要素に関して好善社文書の特徴をふまえつつ吟味した結果、ISAD(G)の26要素のうち、20ないし21要素について記述を行うこととした。また、このうち9要素は最上位記述単位（フォンド）と、後述する調査過程で決定したサブフォンドのみに適用するため、シリーズ以下ファイル、アイテムレベルについては、記述単位ごとに11ないし12の要素について記述することとした［表3］。

12 ――小川千代子「ISAD(G)の実相：アジア歴史資料センターの階層検索システム」、『レコード・マネジメント』vol.45、2002年、10-25頁

13 ――*Dublin Core Metadata Initiative*, http://dublincore.org/（2014年12月8日閲覧）

14 ――Appendix A, *Encoded Archival Description Tag Library Version 2002*, The Society of American Archivists, 2002.

4-3：ISAD(G)要素記述の限界

目録記述の過程で、ISAD(G)要素が本来的に持っている根本的な問題がいくつか顕在化した。ここではそのうち「日付」と「記述単位の数量とメディア」についてEADの該当タグと比較することで問題の所在を明らかにし、アーキビストが目録記述において直面するであろう課題を確認したい。

Date(s)（日付）

資料の年代、日付を表すISAD(G)の要素3.1.3 Date（日付）は、記述上の複雑な問題を含んでいる。もし、ある事務文書の右肩に日付が入っていれば、これを資料の年代とすることが妥当であろう。また、特定の業務を遂行する上で作成された複数の文書を含むファイルがあった場合、このファイルの年代はファイルに含まれる文書の最古のものから最新のものまでを幅のある年代として記述することが妥当と思われる。以上2つの種類の年代についてはISAD(G)の第1版（1994

表3 ――ISAD(G)⇔EAD対応表と各要素適用レベル一覧

ISAD(G)	EAD	フォンド	サブフォンド	シリーズ	ファイル	アイテム
3.1.1 Reference code(s) 資料番号	<eadid> <unitid>	✓	✓	✓	✓	✓
3.1.2 Title タイトル	<unittitle>	✓	✓	✓	✓	✓
3.1.3 Dates 日付	<unitdate>	✓	✓	✓	✓	✓
3.1.4 Level of description 記述レベル	<archdesc> <c>	✓	✓	✓	✓	✓
3.1.5 Extent and medium of the unit 記述単位の数量とメディア	<physdesc> <extent> <physdesc> <dimensions> <physdesc> <genreform> <physdesc> <physfacet>			(✓)	✓	✓
3.2.1 Name of creator 作成者名称	<origination>	✓	✓	(✓)	(✓)	(✓)
3.2.2 Administrative/Biographical history 組織歴または履歴	<bioghist>	✓	✓			
3.2.3 Archival history 資料の来歴	<custodhist>	✓	✓			
3.2.4 Immediate source of acquisition 入手先	<acqinfo>	✓				
3.3.1 Scope and content 範囲と内容	<scopecontent>	✓	✓	✓	✓	✓
3.3.2 Appraisal, destruction and scheduling 評価	<appraisal>					
3.3.3 Accruals 追加受入	<accruals>	✓				
3.3.4 System of arrangement 編成	<arrangement>	✓	✓	✓	✓	(✓)
3.4.1 Conditions governing access アクセスの制限	<accessrestrict>	✓				
3.4.2 Conditions governing reproduction 複製の制限	<userestrict>					
3.4.3 Language/scripts of material 言語	<langmaterial>	✓				
3.4.4 Physical characteristics and technical requirements 物理的特徴・技術的要件	<phystech>			(✓)	✓	✓
3.4.5 Finding aids 検索手段	<otherfindaid>	✓				
3.5.1 Exitence and location of originals オリジナルの所在情報	<originalsloc>					
3.5.2 Existence and location of copies コピーの所在情報	<altformavail>					
3.5.3 Related units of description 関連記述単位	<relatedmaterial> <separatedmaterial>					
3.5.4 Publication note 出版書誌情報	<bibliography>	(✓)	(✓)	(✓)	(✓)	(✓)
3.6.1 Note 注記	<odd> <note>			(✓)	(✓)	(✓)
3.7.1 Archivist's note アーキビスト情報	<processinfo>	✓				
3.7.2 Rules or conventions 記述規則	<descrules>	✓				
3.7.3 Date(s) of descriptions 記述日	<processinfo> <p> <date>	✓	✓	✓	✓	✓

年）においてはそれぞれ、「3.1.3 Date of creation of the material in the unit of description（資料作成年月日）」と「3.2.3 Dates of accumulation of the unit of description（資料蓄積年月日）」として表すことが求められていた。つまり、3.1.3が個々の資料の「誕生日」を記録するのに対し、3.2.3ではそれらを生んだ組織がその資料の「作成収集活動に従事した期間」が表されることを意図している[15]。

しかし、今回の研究で行きあたった下記のような文書の年代はどうであろうか。古い好善社の議事記録、例会記録のうち重要と思われるものについて100年史編纂時に原稿用紙に書き写したものが発見された。おそらく編纂作業の中で原本参照をする際の煩雑さを軽減するために作成されたものと思われた。この資料の年代はいつか。原稿用紙には書き写し作業の行われた日付が記されている。この日付をもって3.1.3の資料作成年月日であると判断することは可能である。しかし、この資料の内容であるところの議事例会が開かれた日付を記述する必要はないのであろうか。この資料が利用されるとき、どちらかと言えば議事例会の日付こそ、利用者に求められる年代ではないか。この問題は森本祥子の諸家文書へのISAD(G)適用でも記述上の重要な問題点として指摘されている。それによればこの書き写された元の記録の日付情報は「内容情報の年代」とでもいうべきもので、ISAD(G)には記すところがないといい、「第三の要素である『内容情報の年代』の欄を設けることで、数多く存在する写史料の扱いが統一されることが期待される」と述べている[16]。

ところが、この論文から数年を経て発表されたISAD(G)の第2版（2000年）では、資料の年代に関する記述要素は3.1.3 Date(s)ひとつに集約されており、そこに含まれるべき年代として、「『資料の作成年代』『資料の蓄積年代』『添付された資料または蓄積以前に作成されたオリジナルの資料の作成日』の3種の年代のうち『少なくとも1つ』を含むべきである」（筆者意訳）と変更された。森本論文の提起した問題を受け止めつつも、要素を細分化して厳密な記述を促すのとは逆に、3種類目の年代をも含めた、より自由度の高い記述を認めることで記述者の裁量を尊重する方向を示した。これにより、記述者は自己の判断で3つの年代のうちひとつあるいは複数のものを任意にDate(s)要素に盛り込むこととなった。記述した年代が3つの種類のうちどれであるかを利用者に伝えたい場合は「1860-1865（資料の作成日）」のように括弧書きする方法が示されている。

2014年9月現在、アメリカアーキビスト協会のEAD技術小委員会（Technical Subcommittee on Encoded Archival Description）はEADの新しい版（仮称EAD3）に向けての改訂作業を行っている。すでに最終案の細部に関する検討段階にあり、2015年春に公開を予定している。いくつかのEADタグについてはEAD2002から大幅な変更が加えられている[17]。EAD2002では日付用のタグとして<unitdate>が用意されていた。これはISAD(G)の3.1.3および3.2.3に相当す

15 ── 前掲註2, 3.1.3 Dates of creation of the material in the unit of description, 3.2.3 Dates of accumulation of the unit of description.
16 ── 森本祥子、前掲註9、252頁
17 ── *EAD Revision Progress Report*, http://www2.archivists.org/sites/all/files/eadRevisionProgress_2013-08-16.pptx,（2013年9月30日閲覧）

るものであった。EAD3案では<unitdate>は残しつつも<unitdatestructured>というタグが新設された。その下層に<datesingle>と<daterange>が設定され、さらに<daterange>の下層に<todate>と<fromdate>を設定し自至年を表す仕様である。以下にEAD2002とEAD3による年代記述の例をあげる。

例1 ―― EAD2002による日付の記述

```
<unitdate>1 June 1971 to 30 April 1974</unitdate>
```

例2 ―― EAD3による日付の記述

```
<unitdatestructured>
<daterange>
<fromdate>1 June 1971</fromdate>
<todate>30 April 1974</todate>
</daterange>
</unitdatestructured>
```

ISAD(G)が国際標準として記述の大綱化、簡略化へ向かったのとは対照的にEADはあくまでデータベースとしての機能が十全に発揮されることを念頭に開発が進められている。EAD3においても、先の「作成年代」「蓄積年代」「内容情報の年代」といった年代の種類の書き分けについての問題は未解決のままであるが、将来的に区別されるのではないか。

Extent and medium of the unit of description（記述単位の数量とメディア）

ISAD(G) 要素3.1.5 Extent and medium of the unit of description（記述単位の数量とメディア）は、ある記述単位の中に、どういう形態のどういう種類のものがどれくらい含まれているかを表す要素である。この要素もDate(s)とならんでISAD(G)とEADの差異が際立っているため、以下にEAD2002およびEAD3における記述の詳細を紹介し、その違いを明確にしたい。

この要素に対応するEAD2002のタグとして<physdesc>がある。<physdesc>は数量関連情報を包括的に記述するためのタグだが、その下位に<extent>、<dimensions>、<genreform>、<physfacet>の4つのタグが、より詳細な記述のために用意されている。それぞれの定義と例を以下に示す。

<extent>
（定義）資料の数量もしくはその記述単位が占める物理的スペースを表すタグ。ものの物理的および論理的数を表す。
（例）「100箱」「50フィート」「14通」「0.75立方メートル」「16アイテム」
–
<dimensions>
（定義）記述単位のサイズ・通常数字と単位を用いて表される。
（例）「約230mm x 163mm」
–
<genreform>
（定義）資料の原材料、様式や手法、内容を表す概念などの「ジャンル」、情報の秩序や物理的機能などの「形式」、および「物理的特徴」を表す。
（例）「会計簿」「建築図面」「肖像」「エッセイ」「録音」「ビデオテープ」
–
<physfacet>
資料の見た目に関連する情報を記述するタグで、色、形式、記号または資料の作成に関わる材料、原料、技術と手法を表す。外見から分かる要素のうち特に資料の使用制限に影響を与えると思われるものを記述するよう規定されている。

<physdesc>タグについても、前述の<unitdate>タグ同様、EAD3では大幅な変更が予定されている。上述した4種の情報は、<physdesc>タグの中ではなく新設される<physdescstructured>というタグの中で用いる。また、<extent>は使用せず、代わりに<quantity>（数量）と<unittype>（単位）というタグの組み合わせにより表現するよう変更された。この2つのタグは必須である。<dimensions> <physfacet>は、残ったものの任意使用となった。<genreform>については統制された典拠コントロールを可能にするための<controlaccess>タグ内で使用するよう変更された[18]。

汎用性と正確性

ISAD(G)要素の<unitdate>も<physdesc>も、EADに比して、一つの要素に含まれる情報の種類の多さが際立つ。ISAD(G)がここまで記述の自由度と表現の幅を担保しているのは、国際標準としてあくまでひとつの記述の原則を示すという前提の中で、目標のひとつとしてあげられている「種々の所蔵機関における記述を、ひとつの情報システムへ統合することを実現する」[19]ためであろう。データベースでの高度な詳細検索にも耐えられる詳細で厳密な記述を目指すのであれば、より細かく情報を規定し、複数の要素に振り分ける必要がある。要素の数が増えると目録作成の労力は増すため、ISAD(G)の適用に消極的になる機関

18 —— *Elements_Beta.pdf*, http://www2.archivists.org/sites/all/files/Elements_Beta.pdf（2013年10月1日閲覧）
19 —— アーカイブズ・インフォメーション研究会『記録史料記述の国際標準』、北海道大学図書刊行会、2000年

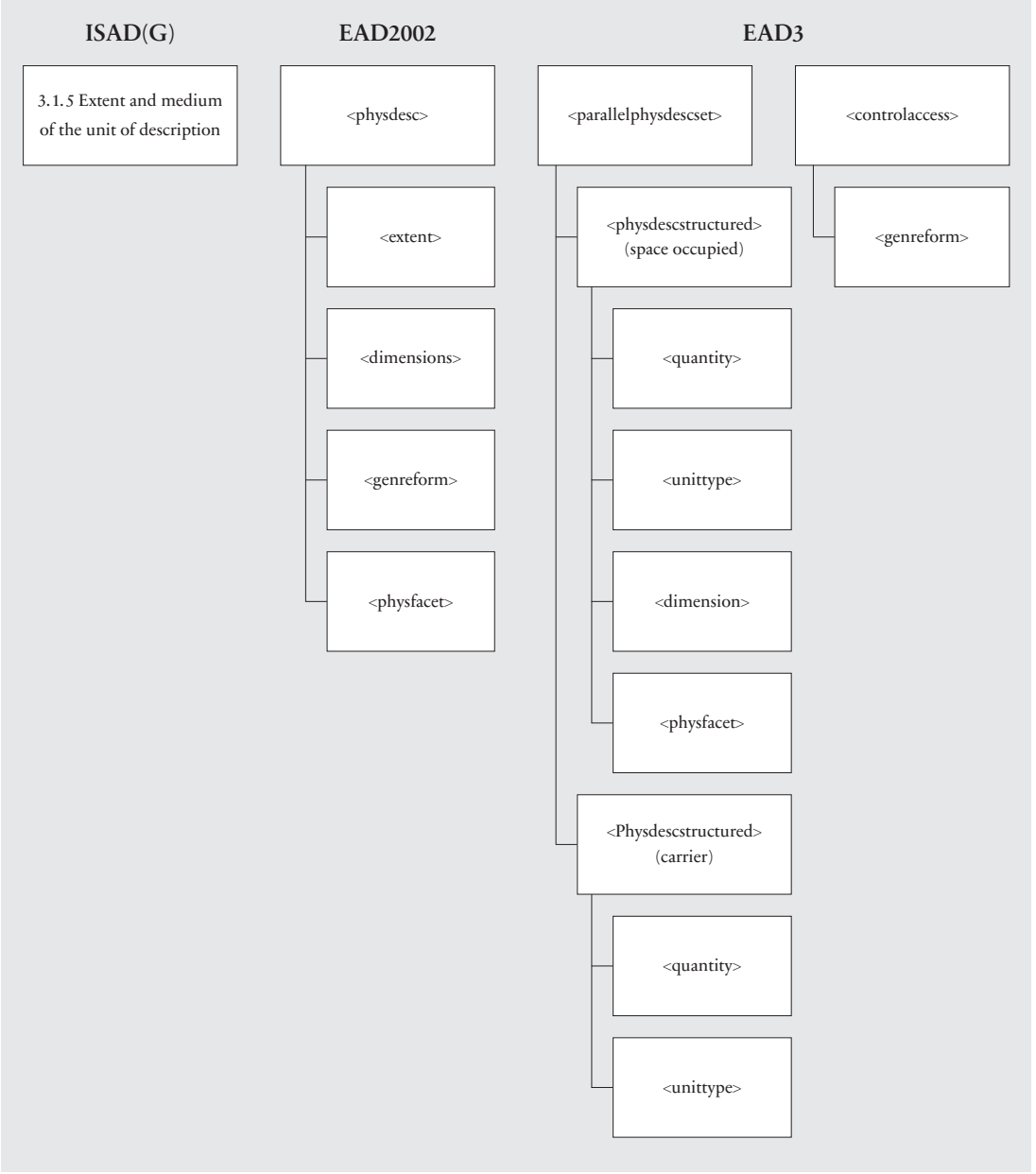


図2 ――数量とメディア情報のISAD(G)、EAD2002、EAD3の記述形式(階層)の比較

が増えると思われる。「ルールが細かくなればなるほど汎用性はなくなっていく。この相反する状況のなかで、ISAD(G)の本来の目的は国際的な情報交換であることをふまえると、国際的な汎用性のほうに重点をおくのが順当であろう」と森本も書いている[20]。ISAD(G)のように要素の数を減らして記述規則を「ゆるやかに」すれば、標準の汎用性は高まり敷衍が促進されるであろうが、いっぽう、検索手段としてのデータベースの観点からは、複数の情報が一つの要素中に含まれていることで条件を細かく限定した検索に対応できない事態を招き、その結果ノ

イズの発生頻度を高めると考えられる。ネットワーク上のデータベースでは、探し求めるものをピンポイントで見つけ出せる環境が求められる。国際標準に準拠した世界共通のプラットフォームでの検索を可能にするという理想を持ちつつも、高度な検索に耐えうる質の高いデータベースのためのデータ構造を目指すべきであろう。目録記述の粒度（史料群をどこまで細かく目録化するか）は、利用者が個々のアーカイブにどのような情報を求めているかを見極めつつ、アーカイブズ機関自身が目録化に投資できる人的・物的資源の多寡とのバランスの上で決定しなければならないと考える。

20 —— 森本祥子、前掲註9、255頁

4-4：非組織的文書の編成上の問題

ISAD(G)の第0章、Glossary of terms associated with the general rulesでは、フォンドを「特定の人物・家・団体による活動を通じて有機的に作成・蓄積・使用された史料群全体（形式や媒体は不問）」と定義している。企業ほかの組織全体にわたる史料群を整理の対象とした場合には、その総体がフォンドとなる。また、サブフォンドは「親となる組織・団体の行政・管理・経営上の下位区分に対応する関連史料群を含む、フォンドの下位区分（以下略）」とされている。組織文書においては、支社あるいは部署という単位の資料がこの階層に相当すると思われる。

しかし、個人、家が収集作成した史料群の整理にあたっては、このようにフォンド、サブフォンドの標準的な適用レベルを想定することは難しい。また、一般的に組織と称される集まりであっても、固定した複数の部署を持たず、その時々に担当スタッフが一人で当該業務のすべてを担ったり、スタッフ数名でプロジェクト的にチームを組んだり解散したりと流動的な人員配置や部署構成をもつこともある。個人、家、また組織構造の緩い団体の作成した文書には、一貫した作成方法および整理保存方法が確立していない状態で形成された史料群があり、これらは非組織的文書と呼べる。これら非組織的文書の整理にあたってはフォンド、サブフォンドの割り当てを行う前に資料一点ずつを確認することで、それらを生み出した組織の機能と有り様を研究し、理論的秩序を再構築あるいは付与する必要があると考えられる。

好善社は小規模な組織で、そもそも部署部局といった概念がなく、慰廃園の運営は一時期、記録、会計、渉外ほかのほとんどの業務を藤原鉤次郎が一人でこなしていた。決められた書式と形態で作成され続けるはずの日誌ほかの記録も、ハードカバーのノートであったり小形の大学ノートであったりと一定せず、内容も業務日誌と個人の自由日記を兼ねている。一つのノートの中に日誌と会計簿と個人的なメモが混在しているものもある。資料の保管も順不同に茶箱やトランクに詰められていた。したがって、好善社文書の整理においてもまずアイテム、ファイルレベルにあたる一点ずつの資料について記述を行い、そののち編成を試みた。

21 ―― “ …or when that is not possible, to geographical, chronological, functional, or similar groupings of the material itself.”

時期別サブフォンド

ひととおりの記述を終えてみて、編成の鍵となるいくつかの点が判明した。文書全体を「好善社文書」というフォンドに設定することには問題はないが、その下位概念にあたるサブフォンドに部署、部局をもって当てはめることができない。そのため、それに代わるものとして組織活動に固有の特徴がみられる時期ごとにサブフォンドを設定することにした。「好善社」の活動には時代とともに文書の作成主体に無視できないいくつかの大きな変化があることが分かっており、事業の内容、目的、主たる作成者が変遷した時代ごとにそれぞれをサブフォンドとしてみることが可能であると考えたためである。ISAD(G)の0. Glossary of terms associated with the general rulesにおけるサブフォンドの説明においても、組織部署でサブフォンドを構成できない場合は、地域、年代、機能、資料の類似性をもとに構成できるとされている[21]。好善社文書の場合は各時代で組織としての有り様の差異が顕著であり、出所が別であるという解釈も可能であると考えた。時期別サブフォンドは、史料群すべてを年代ごとに並び替えることで組織のあり方を知る手がかりを失う調査の手法とは異なる。むしろ組織構成に沿った資料の出所を把握できない史料群に対し、時代区分という枠を当てはめてみるのである。以下に採用した時期区分を示す。

• [好善社創立期(第1期:1877(明治10)年－1894(明治27)年)]

1877(明治10)年、ヤングマンが新栄女学校の生徒10名と結成した好善社の目的は社員の相互扶助と伝道活動である。その活動内容は日曜学校、小学校での教育、それに街頭伝道であった。これを第1期とした。

—

• [慰廃園期(第2期:1894(明治27)年－1945(昭和20)年)]

1891(明治24)年前後から好善社の活動の中心は、ハンセン病救済へと移った。初期の慰廃園はキリスト教によるハンセン病患者の魂の救済を唱って活動していた。1899(明治32)年に病院となってからは、中心的な役割はヤングマンから慰廃園監督の大塚正心らに移った。1907(明治40)年以降は全国公立療養所への患者収容を核とした国のハンセン病政策と協力しながら存続した。慰廃園の活動期間であるこれらの時期を第2期とした。

—

• [好善社戦後期(第3期:1945(昭和20)年－1965(昭和40)年)]

太平洋戦争の開戦によって慰廃園は1942(昭和17)年に閉園し、患者は全員、国立療養所多摩全生園へ移った。戦後は藤原鉤次郎が好善社を代表してその活動のほぼすべてを主導した。全国の療養所を訪問するとともに療養所内に礼拝堂を建設する活動に邁進し、1965(昭和40)年までに全国すべての療養所に礼拝堂を建設した。第3期は、慰問・教会堂建設期にあたる時期で、療養所

礼拝堂建設に代表される、戦後の好善社の新たなチャレンジの時期である。

—

• ［100年史編纂資料（第4期：1968（昭和43）年－1978（昭和53）年）］

この時期区分は正確には好善社本体の活動期間に則したものではなく、百年史『ある群像 好善社100年の歩み』の編纂期間にあたる。好善社文書にはこの編纂事業の中で収集または作成された文書が含まれており、資料の利用にあたっては他の資料と判別の必要がある。これらの文書には独立したサブフォンド番号4をあたえた。

以上のように、好善社文書は組織の有り様から大まかに4つの時期に分類できる。これらをフォンドである好善社文書全体の下にサブフォンドとして置くこととした。また、年代不明の資料についてはサブフォンド番号9を付与した。

表4 —— 好善社文書サブフォンド構成

サブフォンド番号	サブフォンド名	年代
1	好善社創立期（第1期）	1877（明治10）年－1894（明治27）年
2	慰廃園期（第2期）	1894（明治27）年－1945（昭和20）年
3	好善社戦後期（第3期）	1945（昭和20）年－1965（昭和40）年
4	100年史編纂資料（第4期）	1968（昭和43）年－1978（昭和53）年
9	年代不明資料	

時期別サブフォンドの問題点

上述の時期区分に従ってサブフォンドを編成する過程で明らかになった3つの問題について考察したい。

1つ目は、単一の資料が複数の時期にまたがっている場合である。日誌などの記録は組織運営の目的、主体が入れ替わっても継続的に同じ媒体に記されるものがある。この場合、1つの記述単位のデータをコピーして2つ作成してそれぞれのサブフォンドに入れることも可能であるが、同一の実体に対し複数のデータを作成することはのちのデータベース化を考えた場合、管理上の支障となることが考えられる。「内容全体からどちらのサブフォンドに入れた方が後の研究利用に資するか」を判断の基準とし、片方のサブフォンドにのみ入れることが妥当ではないだろうか。目録上においては入れられなかった方のサブフォンド下には表示されないが、電子目録であれば史料群全体を（サブフォンドを越えて）年代順に並び替えることができるため大きな支障はないと思われる。

2つ目は1978（昭和53）年刊行の100年史『ある群像』のための編纂作業（またはそれ以前に行われた整理作業）で形成された資料の存在である。本来ならば第1期、第2期に含まれるべき資料が、編纂作業の中でひとまとめにされて

22 ―― Lyn Milton "arrangement and description", *Keeping Archives 3rd edition*, 2008, p.261.

いるものがあった。具体的な例として、過去の文書から特定のテーマに沿った資料や特定の人物や出来事に関しての資料をまとめて封筒に入れたものがある。時期別のサブフォンドを厳密に適用するのであれば、封筒の中身を分解し、時期ごとに仕分け、それぞれ別のサブフォンドへ仕分けすることになる。しかしこの場合は封筒ごと第4期として扱うのが望ましいだろう。一般的に組織変遷の過程で現用文書の編成が変更された場合、最終的にアーカイブズが受け入れる時点での最新の編成を適用する[22]。100年史編纂担当者はこれらの文書を現用文書として扱ったわけではないが、作成当初現用だったものに対して組織構成員が新たな秩序を形成したという点において一般的な方法を踏襲することが妥当と考えた。

3つ目の問題は、年代が不明なアイテム資料についてサブフォンドをどう設定するかである。理論的にはこれらの資料はどの時期別サブフォンドにも入れることができないため、フォンド直下のアイテムとするのが正しい。しかし、空のレベルを0で表す資料番号体系を付与した際にサブフォンド番号が0となり、番号順リストにおいてこれらの「その他」的扱いの資料が最上部に表示される。編成記述の作業の効率と目録として出力した際の見やすさを考え、年代不明資料には仮想のサブフォンドを設け、前述の通り0ではなく9という番号を付与した。

人為的シリーズによる資料種別表現の可能性

ISAD(G)の第0章、Glossary of terms associated with the general rulesによれば、シリーズは「ファイリングシステムに準じて作成されるか、同一の活動や同一のファイリングの方法の結果一つのまとまりとして維持されているもので、一定の形式を持つもの」と定義されている。好善社文書にも日誌や会計簿など内容の連続性のある資料が含まれており、シリーズレベルとして記述した。しかし、これらの内、はっきりとしたファイリング形式を持つまとまりのある資料は少数であり、大部分は他資料との関連が不明な単独資料であったため、シリーズとしてまとめられなかった。これらの多くの資料が時期別サブフォンドの直下に単独のファイルまたはアイテムとして順不同に投げ出された状態で大量に存在することとなった。

これらの資料に資料種別をもとに一定の秩序を与えグルーピングすることで、階層構造の中での把握を可能にした。ある程度のまとまりがあると思われる資料について、内容種別ごとに「書簡」「建築関係」「イベント関係」「名簿・リスト」などの人為的シリーズを作成し、資料番号にもそれを反映させた。そうすることでエクセルのようなスプレッドシート形式でデータを並べ替える際や冊子体として目録を印刷した際にも資料を探しやすくなる。たとえば藤原鉤次郎が書いた書簡を検索したいと思っても、藤原鉤次郎という作成者だけをたよりにして検索することは効率が悪い。その点、書簡がひとつのシリーズの下にまとまっていれば検索はしやすい。先述の安藤論文でも、物理的なまとまりを持たなかった一連の関連資料

に対して目録編成上の概念的サブシリーズを設定している[23]。ただし本来のシリーズはあくまで資料の作成者による資料の整理方法の結果生じるまとまりであるため、資料種別をもとにした人為的シリーズとすることには議論の余地があると思われる。

資料種別については、シリーズなどの階層構造ではなくEAD2002、EAD3の<genreform>タグを使用して表現することも可能であろう。すべての書簡資料に対し<genreform>に「書簡」という語句が入力してあれば、データベース化された目録を検索する際に「作成主体」<origination>との掛け合わせ検索を行うことで目的の資料だけを抽出できる。

ただし、人為的シリーズの使用もしくは<genreform>の使用いずれの場合も、資料種別を表現する語彙を、アーキビストがその場の判断で恣意的に付与したのでは史料群を越えた普遍性を目録に与えることができない。この点、図書館資料においては "Library of Congress Subject Headings"[24]や『基本件名標目表：BSH』[25]など、既存の件名の統制語体系が国際または国内標準として多くの図書館に共有されている。米国アーカイブズ機関において使用されていた語彙集としては1985年にRLG（Research Libraries Group）によって発表された "Form Terms for Archival and Manuscript Control（FTAMC）"[26]がある。アーカイブズおよび手稿資料に特化した資料種別記述のための基本的語彙集で368語からなるが、現在はゲッティ財団（Getty Trust）が維持している "Art & Architecture Thesaurus（AAT）"[27]という、より包括的なシソーラスの中に組み込まれている。アーカイブズ目録記述における資料種別の有用性を尊重するのであれば、これらをモデルに日本においても国内アーカイブズで使用可能な日本語の統制語彙集、シソーラスの作成に着手すべきと考える。しかし、たとえばFTAMCやAATをそのまま和訳しても文化的差異ゆえ日本での使用には適さないであろう。国内資料に適用可能な語彙体系の構築には、多くのアーキビストの協力と長い時間を要するであろう。当面は、個々の史料群に対し、アーキビストがその時に選択し得る最も適切と思われる統一表現された語彙によって資料種別を記述することがアーカイブズ資料の提供と利用に利益をもたらすと考える。

5 —— まとめ

以上好善社文書の調査中、編成と記述を通じて見いだされた問題点とそれらへの対応について、研究ノートの形で報告した。原秩序を失った史料群に対する、編成前の記述の有効性が本調査により確認できた。しかし、より大規模な史料群において編成前にすべての資料を記述することは、多大な労力を要するため、

23 —— 安藤正人、前掲註10、203頁
24 —— *Library of Congress Subject Headings*, http://id.loc.gov/authorities/subjects.html（2014年11月16日閲覧）
25 —— 日本図書館協会件名標目委員会『基本件名標目表：BSH』、日本図書館協会、1999年
26 —— Thomas Hickerson et al., *Form terms for archival and manuscript control*, Research Libraries Group, 1985.
27 —— *Art & Architecture Thesaurus Online*, http://www.getty.edu/research/tools/vocabularies/aat/（2014年11月16日閲覧）

現実的ではない。たとえばサンプリングにより抽出した資料のみを記述するなどの工夫が有効かもしれない。アーカイブズ資料の記述と編成はISAD(G)という国際標準の登場で一つの理論的到達を得たと言えよう。しかし、ISAD(G)が定義するシリーズ・ファイル・アイテムという階層の名称は、組織における文書のファイリング方法をモデルとしており、小規模の個人・家文書においてこれらのレベルの整合性を保つことは容易ではない。目録編成における階層構造の有用性を尊重しつつ資料を整理するためには、作成部署に拠らないサブフォンドや資料の内容情報に基づく人為的シリーズを導入するのが妥当と考える。

ISAD(G)はアーカイブズ目録記述の一般原則を示したもので、これに沿った記述が、そのまま高度な検索に耐えうるデータベース用のデータにはなり得ない。また、より多くのアーカイブズにおいて導入されることを前提としているため、今後これ以上に厳密な記述原則を求めるとは考えにくい。いっぽうxmlによるデータベース化を前提としたEADは、2002年版に次いで近く発表予定のEAD3ではいっそうの細分化によりデータベースとして機能するデータ群の生成を目指しているが、このレベルの記述を実現できるアーカイブズ機関は限られるであろう。まずはデータの粗密にかかわらず史料群の内部で整合性を保った階層構造あるいは統制された語彙の使用による編成と記述を目指したい。もっとも重要なのは目録利用者の便益である。

本調査で適用した人為的シリーズもしくは<genreform>タグにおいて表現される資料種別情報はアーカイブズ資料にとってきわめて重要な役割を果たすのではないだろうか。図書の書誌データに見られる「書名」「著者名」「出版社」「出版年」のように多くの利用者に予め了解されうる要素が少ないアーカイブズ資料にとって、資料種別による絞り込みは資料検索の鍵となると考える。

好善社文書は家文書・個人文書の様相が濃かったため、調査を通じて典型的な組織資料よりも多くの知見が得られた。今後、さまざまな史料群に対するISAD(G)、EADほかの標準の適用に関する報告が研究者諸氏により活発に行われること、それによってアーカイブズ目録作成に関する議論が厚みを増すことを期待したい。